

町

〔運歩色葉集 伊市町 人皇廿代持統天王之時、諸國市町始也。〕

〔日本釋名上地理〕町

まは間なり、ちは道也、田の間、市の間の道也、又ちは筋なり、田間及町のすぢなり。

〔倭訓栞前編二十九〕まち 町をよめり、間路の義なるべし、或は區をよめり、○下

〔類聚名義抄三木村 聚落也、音尊サトノミタク、和又受ノムラ〕

〔伊呂波字類抄地儀〕村 ムラ 邑四井 爲邑

〔運歩色葉集無村〕

〔書言字考節用集一乾坤〕村 本字郵、韵會、人所聚居、謂之村落、同音律有市名聚落、無市名村、同壁宇彙、村也、韵

〔日本釋名地上地理〕村 むらはむらがる也、人のむらがりすむ所也、

〔東雅三地輿〕村 ムラ ムラとは聚也群黎の聚をいふ也、邑の字讀てムラといふ亦同じ、日神、天邑君

を定められしと見え、又成務天皇の御時、國郡邑里を定められしなど見えしが如き是也、邑と村と其字同じからねど、其實は異なるにあらず、景行天皇紀に村亦讀てフレといふは、ムラといふ記の轉せしなり、亦安閑天皇紀に竹村の地讀て、タカフといふは、猶茅生せし地をヲフといひ、茅生せし地をチフといふが如し、後にタカムラといひしは即是也、村亦讀てスキといひ、スクといふが如きは、百濟の方言也、また古時人名姓字等に、村主の字見えて、讀てスクリといふが如きも、亦百濟の方言也、凡姓字に村主と稱せしは、皆是大漢三韓等の諸蕃也、それが中に、漢人の如きも、其祖先三韓の地に流寓し、彼土の村主などいふものになりしが、我國に歸化せしに、かへりて姓となりし所なり、と見えたれど、

〔倭訓栞前編三十二〕むら 村邑をよめり、群居の義也、村里を通じいへど、靈異記に、越前國加賀郡大野里畝田村と見えたれば、村は里の内たるべし、又相模集に、あと村の里とよめり、されば五十